慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	副島八十六著 帝国南進策
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.3 (1917. 3) ,p.427(109)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170301-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

必逼せる際には利子歩合は平時より遙かに高率に定めらるることあり。されど、斯くの如く恐慌時に於ける利子歩合が平時よりも昂騰するは平時よりも資金の供給が減少する故なりとす。換言すれば、恐慌に於ても利子歩合の決定上需用供給の法則は依然として行はれつゝあるなり。而して一方平時に於ても利子歩合が資金の需用と供給との間に於ける關係にて定まるものなりとせば、恐慌時の金融と平時の金融とが全然別箇の法則に依りて支配せらるゝものなりと云ふことを得ざるに非ずや。若し果して然らば、フ氏の如く恐慌時に於ては貨幣の數量が利子歩合を左右するものなりと認むる限り、平時に於ても前者は後者に對して常に何等かの影響を與ふるものなりと推斷す可きに非ざるか。

一國の貨幣流通高が多年の間一定し、物價にも異動なく、貨幣の需用並に供給も亦年々變動せずして常に同一額を維持するが如きことあらば、貨幣は單純なる交換の要具となり了りて、其數量の大小は何等の影響を利子歩合に及ぼさゞるならん。されど、斯くの如き純然たる靜的狀態は勿論實社會に於て之を觀ることを得ざるなり。假令程度の差はあるとも今日何處の社會に於ても貨幣の數量並に物價は日々變動すると同時に、資金の需用供給も亦刻々伸縮しつゝあり。貨幣の數量が利子歩合に影響を及ぼすは即ち此等の變動に伴ひて發生する現象なりとす。

（未完）

註一、Irving Fisher : The Rate of Interest. p. 319.
註二、Ibid, pp, 319-320.
註三、物價對利子歩合表の批評に就きては河上博士の「利子論上の貨幣說」（「商業及經濟研究」第三册）を參照せよ。
註四、Fisher : The Rate of Interest, p. 321.
註五、Ibid. P. 322.
註六、Ibid, P. 325.

批評と紹介

『帝國南進策』

副島八十六著

大正五年十月民友社發行四六版本
文二八七頁附錄五一頁定價金壹圓

本書は南洋の事情に精通せる副島氏が其研究の結果並に印度及南洋に對して我帝國の採る可き政策に關する著者の主張を公表する爲めに著述せるものなり。著者は先づ日露戰爭前に於て我國には國民的活動の目標と看做す可きものありしも其後國運の發展するに連れて此目標が煙滅せるの事實を指摘し今日の急務が「豫言者的人傑の躍出に依つて此大標目を最も鮮明に國民の眼前に指示する」の一事に存せりと前提して此所謂國民的大目標を以て「東洋の盟主たるべき天職を實現するに在り」と斷ぜり。以て著者の抱負と用意との凡ならざるを示すに足らん乎。

著者は即ち此見地に立ちて印度並に南洋に於て將來商工業を大に振興するの必要あるを力說せり。而かも著者は決して北守南進論を採る者に非ずして、我國が東西南北に發展す可きものなることを主唱するものなれど、本書に於ては主として南方經營策を講究せるなり。此立脚地よりして著者は印度並に南洋諸島の富源をば統計的に紹介し、轉じて我國と此等の地方との交通史を略叙したる後、今次戰爭中我國の占領せし南洋諸島の價値に論及し、此等の諸島は物質上に於て殆んど一顧の値を有せざるも學術上、航海上、國防上に於ては頗る重要なるのみならず、南洋發展の一門戸としての精神上の價値鮮少に非らずと結べり。

次に著者は印度並に南洋對我國の貿易が微々として振はざるの事實をば統計に依りて立證し、將來發展の餘地少からざる所以を說き、參考として上記諸邦に於ける內外定期航路に關する詳細なる表を掲載せり。轉じて著者は又我通商貿易界の缺點を指摘し、且つ貿易振興策に對する著者の希望を述べ最後に歐洲大戰は我國が東洋の盟主たる可き天職を遂行する爲めに千載一遇の好機會を與ふるものなりと論じて本文を結べり。卷尾の附錄には明治三十六年中神田青年會館にて開催せられたる東洋協會講談會に於て著者の試みし「南洋經營論」と題する講演の筆記を載せたるが、其講演の主旨は大體に於て本書の本文に開陳されたる南方發展論と同一なり。要するに、本書は印度並に南洋諸島の經濟事情に就きて幾多有益なる事實と統計とを載せたるを以て、此等諸國の研究者に取りては一好參考書たるを失はざるなり。